

The Fire Next Time

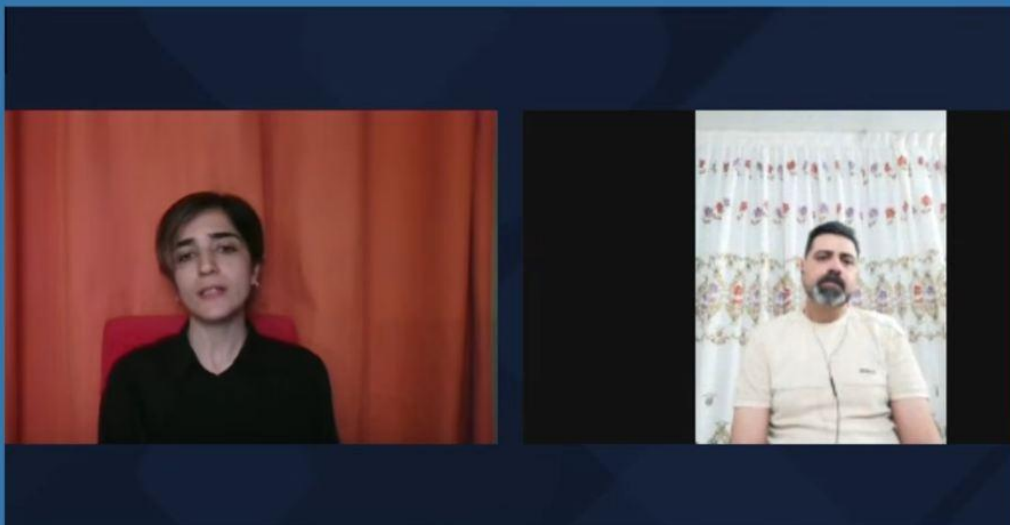
A quiet space in the noise — drifting thoughts,
small truths, and everything in between.

Siyavash Shahabi



パン、自由、そして組織化～今日のイランについて イスマイル・バフシが語る

2026 年 5 月 1 日



گفتگو با اسماعیل بخشی فعال کارگری در مورد وضعیت کنونی کارگران ایران



#اسماعیل_بخشی تراژ-مصاحبه‌ی اول/ واقعیات و ناگفته‌ها از قعر اینترنت طبقاتی- مصاحبه با

インタビューは <https://youtu.be/NnQjf25Mnwo?si=MyAK2HIFR1t8fa4C> より視聴可能

ハフト・タッペ〔イラン南西部フーゼスターン州。紀元前 15 世紀頃のエラム王国の遺跡で有名〕の著名な労働者であり労働運動家でもあるイスマイル・バフシは、メーデーの日の対話を、一見すると技術的な問題のように思える点から始めました。それはインターネットです。しかし非常に迅速に、これは今日のイランにおける最も

明白な兆候の一つへと変わります。彼は、単にオンラインの会話に参加するためだけでも、友人たち、VPN、技術的な設定、多大な努力、そして高額な費用に頼らざるを得なかったと説明しています。彼によると、このたった 1 回の通話を可能にするためだけに、200 万トマン〔平均月収の数分の一にあたる〕近くが費やされたといえます。

これは単なるネット検閲の話ではありません。この点から、バフシははるかに深い問題、すなわちイランにおけるインターネットアクセスの階級的な性質へと移行します。水や電気、通信、公的情報のように、誰もが利用できるべきであるものが、今やお金や人脈、技術的ツール、そして特別なアクセス権を持つ者たちの特権と化してしまっているのです。対話や組織化、情報、そして社会的なつながりのためのツールとなり得たはずのインターネットが、それ自体、階級格差の一部となってしまっています。

このような状況下で、労働者、教師、看護師、退職者、囚人の家族、抗議活動を行う人々、そして貧しい賃金労働者たちは、路上や職場から追い出されているだけではありません。彼らは通信の空間からも押し出されているのです。強要された沈黙は、警棒や刑務所だけで作られるものではありません。それは、人々を遮断し、アクセスを高額にし、フィルタリングをかけ、インターネットを高級品に変えることによって作り出されているのです。

古い階級的境界の崩壊

ここから、バフシは社会のより広範な状況へと話を移します。彼は、今日のイランにおいて、賃金や給与で生活しているほぼすべての人が、実質的に下層階級へと押し下げられていると語ります。これは単に貧困を描写しているだけではありません。古い階級の境界線が崩壊したことを描写しているのです。インフレ、失業、戦争、弾圧、そして不安定さが日常生活を飲み込んでいる経済においては、押し下げられているのはもはや工場の労働者だけではありません。教師、看護師、事務職、退職者、店員、契約労働者、学生、そして低所得世帯のすべてが、同じ圧力の場に閉じ込められています。

しかしバフシにとって、問題は暮らしの糧だけではありません。彼は戦争を「絶対的な悪」と呼びます。彼の見解では、戦争が起きる前からイラン社会にすでに存在していたあらゆる苦しみは、戦争によって何倍にも増幅されました。物価高、インフレ、失業、資金不足、医薬品の不足、そして自由の欠如は、すでに存在していたのです。しかし、戦争はそのすべてを激化させました。彼は、戦争が苦しみを 10 倍、時には 100 倍に増幅させると語ります。この視点は、反戦であると同時に、物事を単純化することに反対するものです。なぜならバフシは、戦争の前は生活が良かったと言っているわけではないからです。それどころか、人々は戦争の前からすでに圧力を受けていたが、戦争がその圧力を新たなレベルの悲劇へと押し進めたのだということを、彼は強調しています。

ここで彼の批判は 2 つの方向へと向けられます。一方では、「人道支援」といった言葉で爆撃や戦争を美化する人々を批判します。もう一方では、イスラム共和国とその国内の戦争支持者たちの責任も免除しません。彼の言葉を借りれば、政府は何年もの間、戦争を愛してきました。そして今、戦争が現実のものとなり、街頭は国旗や国家の演出の舞台へと変えられましたが、国民はインフレ、失業、収入の喪失、そして無力感の中に置き去りにされています。

バフシが描く絵の中では、戦争はミサイルや爆弾だけを意味するものではありません。戦争とは、主要な工場の操

業停止を意味します。それは仕事の連鎖の崩壊を意味します。それは何千人もの契約労働者やプロジェクト労働者が職を失うことを意味します。それは物価が一瞬一瞬で上昇していくことを意味します。それは、明日自分たちのパンや薬、家賃、あるいは仕事はどうなるかも分からないまま人々が生きることを意味するのです。大規模な工場や製鉄所、基幹産業、あるいは生産拠点が打撃を受けたり閉鎖されたりしたとき、停止するのは一つの経済単位だけではありません。それに伴い、何十、何百もの契約会社、サービス会社、依存関係にある企業も共に倒れます。この構造において、戦争は上層部から始まりますが、その代償は社会の最底辺へと着床するのです。

政治利用の危険性

それでもなお、バフシの言葉の中で最も重要な部分は、彼が抗議活動、ストライキ、そして政治的横領の経験について語るときに現れます。彼は、もし労働者が独立していなければ、1月の抗議運動で起きたことと同じことが起きると述べています。すなわち、人々は経済的圧迫、苦しみ、権利の欠如、そして社会的な怒りから路上に出るものの、社会の実体から外れた政治勢力がその運動を乗っ取ろうとするのです。その結果、人々は銃弾の前に送り出され、代償を払い、殺害され、逮捕され、処刑される一方で、自分たちの名前でスローガンを掲げた者たちは決して責任を問われないという事態を招きます。

この批判は、特定のグループ一つだけを対象にしているわけではありません。バフシは「横領する野党」について語っています。それは、人々の抗議活動を自分たちのプロジェクトの一部として提示する個人、グループ、そしてメディア機関のことです。彼は、今日のイランには、人々がそのために自らの命を犠牲にする覚悟があるような個人やグループは存在しないと明確に述べています。もし人々が路上に出るのだとすれば、それは彼ら自身の苦しみゆえであり、貧困、弾圧、未来の欠如、権利の欠如、そして自らから奪われた自由ゆえなのです。

この一句は、重大な政治的意味を持っています。これによってバフシは、指導者を作り出すという幻想と、政治的人物やプロジェクトのために「命を犠牲にする」という空想の双方に異議を唱えています。彼は、現代は生命の時代であり、生きた経験の時代であり、人間の命と尊厳を守る時代であると語ります。説明責任を果たさず、現場で代償を払うこともなく、人々のために無料のインターネットアクセスといった基本的なインフラすら構築できない個人やグループのために、誰も命を犠牲にすべきではないのです。

独立した組織化とストライキの力

しかし、バフシは批判だけにとどまりません。彼は進むべき道を、独立した組織化、協会、代表制、そしてストライキの中に見出しています。彼の見解では、組織なき抗議活動は、それがどれほど大規模であっても脆弱なままです。代表者がおらず、明確な要求がなく、独立した主張を持たず、調整も行われていないストライキは、容易に政治利用されてしまいます。彼は、労働者、教師、看護師、学生、バザールの労働者、石油労働者、製鉄労働者、サトウキビ労働者、鉱夫、そしてすべての賃金労働者に対し、いかなる抗議活動の前にも自分たちの中から代表者を選び、要求を明確にリスト化し、誰もその運動を乗っ取ることができない方法でスローガンを掲げるよう呼びかけています。

ここでバフシは平和的なストライキ行動を強調していますが、彼はこの表現が誤解され得ることを知っています。彼にとって、平和的であるということは、改革主義や待機主義、あるいは権力に慈悲を乞うことを意味しません。

それは、労働者が自らの最大の力の源、すなわち「労働の停止」を認識することを意味します。彼は、私たちは武器を持っておらず、それを持つことも望んでいない、と語ります。私たちの力はストライキです。私たちの力は労働の停止です。私たちの力は集団的な組織化です。この政治は、妥協的でもなければ、冒険主義的でもありません。それは、労働者階級の真の力がどこにあるかを理解している政治なのです。

彼は、より成功した事例としてハフト・タッペの経験を振り返ります。彼の見解では、ハフト・タッペをめぐるメディアや社会の支援が機能したのは、労働者が独自の組織、代表者、そして独立した声を持っており、自分たちの運動が容易に乗っ取られることを許さなかったからです。これこそが、バフシがハフト・タッペから社会全体へと広げたいと願う教訓です。もし抗議活動に組織がなければ、他者がそのための組織を作ってしまう。もし独自の言語がなければ、他者がその場所で発言してしまう。もし独自の代表者がいなければ、他者がそれを代表しているかのように装ってしまうのです。

イスラム共和国が終わった後も労働者問題は消え去らない

バフシの議論におけるもう一つの重要な部分は、未来に対する彼の見解です。彼は、たとえイスラム共和国が今日権力を手放したとしても、労働者の問題が解決されるわけではないと警告しています。誰がその後に権力を握ろうとも、イランを再建するためには依然として労働者が必要とされるのです。そして再び、労働者たちは「待つ」ように言われるかもしれません。まずは復興が先だ、まずは再建が先だ、まずは国家の利益が先だ、まずは国を救うことが先だ、と。これは昔からあるお決まりの物語です。だからこそ労働者は、今すぐ自分たちの勝ち取った成果を法律へと変え、独立した組織や労働組合、評議会を構築し、自らの権利を執行するための強力な保証を作り始めなければならないのです。

この見解は、労働者の政治が他の勢力の追随者になってしまうことから救い出します。労働者は、政府や指導者、野党グループ、あるいは救済プロジェクトが到来し、自分たちに権利をもたらしてくれるのを待つべきではありません。権利は組織化されなければなりません。要求は形作られなければなりません。抗議活動は記憶と構造を獲得しなければなりません。ストライキには代表者がいなければなりません。そして、独立性は公的な政治言語にならなければならないのです。

対話の最後に、バフシはメーデーを単なるお祝いとしてではなく、労働者の闘争の歴史を思い起こさせるものとして扱っています。彼は、この日は労働者階級に有利なように法律を変えるために路上に出て、弾圧され、銃撃された労働者たちの記念日であると語ります。したがって彼にとって、メーデーはお飾りの行事ではありません。集団的な闘争なしには、いかなる権利も勝ち取られたことはないということを思い出させる日なのです。

しかし、おそらく彼の言葉の中で最も痛烈で、かつ最も的確な部分は、「都市の表面」と「都市の表面の下」との間の距離について語っているところです。表面上は、国旗や演出、スローガン、正常化、そして公式なイメージが存在しているかもしれません。しかし表面の下では、悲劇が起きていると彼は言います。それは、失業、収入の喪失、資金不足、絶望、社会の断絶、そして人間の精神的な崩壊です。

これが今日のイランの姿です。戦争、弾圧、貧困、遮断、国家によるプロパガンダ、野党による横領（政治利用）、そして社会的な疲弊がすべて同時に作用している国です。このような状況において、バフシの言葉は重要性を帯びてきます。すなわち、屈服しないこと、他者のために命を犠牲にしないこと、横領（政治利用）されないこと、

戦争に希望を抱かないこと、そして国内や国外の権力に追随しないことです。もし進むべき道がまだ残されているとすれば、その道は労働者の独立性、社会的な組織化、ストライキ、代表制、アソシエーション、そして命を守ることへの道を通るしかありません。

こうした状況下において、メーデーは単なるカレンダー上の日付ではありません。それは、社会がどれほど暗黒の瞬間にあらうとも、依然として下から自らを組織化できるということを思い出させるものです。ただし、それは自分自身の声を決して他人に明け渡さない場合に限られるのです。

原文

<https://firenexttime.net/bread-freedom-and-organisation-esmail-bakhshi-on-iran-today/>